

水底に沈む

浦縫すぐり

どことなく薄汚れた標識が、よそよそしく事務的に鹿角八幡平インターチェンジまであと十キロメートルであることを告げる。日は既に水平線の下に沈んでいる。田舎特有の情緒的な夕闇が、鬱蒼とした森を、遠くにまばらに見える民家を、そして高速道路を走る自動車を包み込んでいる。どの自動車も「まったく、こんなところをえんえんと走らされるおれの身にもなってくれよ」と言っているように見える。

本郷和史もまた疲れ切っていた。そして同時に苛立つてもいた。^{かづみ} どうして今、自分がこんなわけのわからない僻地にいるのか納得が行かなかった。

毎年お盆の時期は、お墓参りのために、秋田県北東部に位置する鹿角市にある父の実家まで出向かなければならない。更に、祖父も祖母も、息子である和史の父親や、孫である和史に会いたがっている。そんなことは和史にだって分かる。祖父母の家には行くべくして行っているのだ。

ただ、そういうまっとうな説明を並べ立てられても、和史はどうしても不条理を感じずにはいられなかった。不条理というほど大仰なものではないとしても、彼は毎年鹿角市にやって来

るたびに、多かれ少なかれ自分はここにいるべきではないという感覚を覚えてしまう。

その理由は大まかに言って三つある。第一に、祖父母の家の周辺には、祖父母の家と同じように古びた民家の群れと、大きな寺とその周りを取り囲む墓地と、嫌気が差すほど青々とした森林——和史は夏以外の季節に祖父母の家を訪れたことがない——のほかには特筆すべきものは何もない。間違っても外で活発に走り回るようなタイプではない和史にとっては、退屈極まりない場所である。

第二に、祖父母も含め、お盆ということで集結する親戚たちは大部分が秋田在住であるため、訛りが相当きつく、話しかけられても彼らの言っていることがまるで理解できない。和史は仕方なく、下手な作り笑いを無理やり顔に貼り付けながら曖昧な返事することになる。ただただ神経が擦り減っていくだけだ。いつそのこと英語で喋ってもらった方がまだマシなのではなからうか。

第三に、ちよつと信じられないくらい暑い。奥羽山脈のご真ん中に位置する盆地であるがゆえに、夏はとにかく蒸し暑くなるのだ。言うまでもなく祖父母の家にエアコンなどという文明の利器は備え付けられておらず、弱々しい扇風機を稼働させて熱帯夜を乗り切るしかない。パートナーとしては余りに頼りな

い。冗談でも及第点に届いているとは言えない。これら以外にも些末な、しかし煩わしい事柄が数多く存在し、その全てが和史の神経を逆撫するのだった。

それに加えて和史の気に障るのは、妹の美菜が祖父母の家を訪れることを楽しみにしており、実際に毎年しっかりと楽しんでいることだ。

和史の三つ下で、今年で十一歳になる美菜は、和史とは違い、とにかく活発で積極的で社交的だ。そのお陰で鹿角でも難なく友人を作ること成功している（本当に驚異なことだ、と和史は思う）。真夏の陽射しが降り注ぐ中、彼らとあちこちを探検したり、市民プールに泳ぎに行ったりしているのだ。別にそうやって友達と遊び回っているのは特に羨ましいとは思わない。インドア派の和史にとって、そうせざるを得ない状況に置かれたとき以外は、釜茹でされているような蒸し暑さの中で体を動かすのは極力控えたい。ただ、自分が苦痛を感じているときに、まるでそれを嘲り笑うかのように思いっ切り楽しんでいる美菜の姿を見ると、遣り場のない怒りが込み上げてくるのだ。

しかし美菜にはもちろん和史を嘲笑しようという気はさらさら無い。美菜は純粹無垢という言葉を具現化したような存在で、彼女の発言はいついかなるときも文字通りの意味しか持たない。言葉の裏に巧妙に他意を忍び込ませるといふ、一般的にしばし

ば用いられる手段を彼女はほぼ採らない。はっきりと言うか、あるいは何も言わないか。彼女には常に選択肢は二つしかないのだ。だから美菜に、「もうすぐおじいちゃんおばあちゃんの家に着くの、なんでそんな暗い顔してるの?」と言われても、和史にはどうしようもないのだ。悪意のない相手に悪意をぶつけるのは妥当な振る舞いだとはとても言えない。

「いや、車に乗りっぱなしだったからちよつと疲れただけ」

和史が弱々しい苦笑いを浮かべてそう言うと、美菜はふーんと興味無さげに返した。

「お兄ちゃんよりれんげの方が疲れてそうだけどね」

そう言われ和史は足元に横たわるれんげの様子を見た。れんげというのは、和史の家で飼っている雌の雑種犬の名前だ。見た目は柴犬に似ており、片耳が常に垂れている。長時間の車での移動が相当こたえているらしく、ぐったりとして四肢をだらしなく投げ出している。美菜が慈しむようにれんげの頭を撫でると、れんげはあまり覇氣の感じられない目で手の動きを追い、それからわずかに鼻を鳴らした。あともうちよつとで着くからね、という美菜の言葉もれんげの耳に届いているかどうか定かではない。れんげは気怠げにそつと目を閉じた。美菜は肩をすくめると、助手席に座っている母親、真希子に向かって今回の帰省ではどういふことをして遊ぶか、その計画を弾んだ声で語

り始めた。

その美菜の様子を見ながら、和史は、自分も彼女のようにもう少し楽しく日々を過ごせれば良いのになという漠然とした思いを抱いた。彼女には、どんな物事からも楽しい側面を見つけ出し、上手く自分を適応させてその楽しみを最大限まで引き出すという、かなり稀有な能力が備わっている。たぶん彼女にはその自覚は無いだろう。しかし、長年共に過ごし、鋭い観察眼——少なくとも和史はそう自負している——で以て彼女を分析してきた和史にはそのことがよく分かる。きつと美菜はこれからも人一倍幸せな人生を歩んでいくのだろう。羨ましくないとさえ嘘になる。でも仕方のないことなのだ。自分というものはどこまで突き詰めても自分にほかならない。手に入る見込みのないものを切望し続けるよりは、元々の持ち合わせでなんとかうまくやっていく算段をつけようと努める方がずっと賢明だろう。

少し口がさみしく感じられ、和史はかばんをごそごとと漁って飴を取り出した。オレンジ味。どちらかというと葡萄味が食べたい気分だったが、面倒だったのでそのまま包装を開けて口に放り込んだ。ふと垂れ流されているラジオに耳を傾けると、ちやうど明日の天気予報をやっているところだった。

「美菜、少し声の音量下げて」

真希子と楽しそうに談笑していた美菜は、和史の言葉に一瞬むっとした表情を見せたが、簡潔に「天気予報」だけ伝ええると渋々承服したようだった。「別に天気予報を聞いたって涼しくなるわけじゃないのに」と美菜が言ったように聞こえたが、和史は涼しい顔をして聞こえなかった振りをした。

はきはきとした女性の声が、どこか楽しそうに各地の気温と天気を告げる。明日の祖父母の家の周辺地域の最高気温は三十四度、晴れ時々曇りで降水確率は午前午後ともに十パーセント。熱中症には十分お気を付け下さい、紫外線対策も忘れずに、というおまけのコメントつき。概ね予想通りといったところだ。照り差す日差しを浴びてあらゆるものが火炎の如く燃え上がる昼。湿った暑苦しい空気が肌に纏わり付く夜。毎年恒例である。この期に及んで嘆くのも馬鹿馬鹿しいと言えば馬鹿馬鹿しいのかもしれない。はあ、と思わず和史が溜め息を漏らすやいなや、美菜が咎めるような視線を和史に向けた。

「溜め息をついた分だけ幸せが逃げるんだよ。知らないの？」
「ごめん、気を付けるよ」とうわべだけ和史は謝っておく。逃げただけの幸せなんか今は持ち合わせてないよ、と言ってしまうたくなるのを何とか抑えるため、和史は飴を噛み砕いた。尖った飴の破片が口内をちくちくと刺激する。この微かな痛みは何かのメタファーなのだろうか、と和史はとりとめのないことを

考える。そんなこと分かるはずがない。誰にも。小説の読み過ぎだ。

和史たちの乗った車が祖父母の家に到着したのは、午後七時半を回った頃だった。冷房の効いた車から外に出た瞬間、全身がもわっとした熱気に包まれる。その感覚はさながら更衣室から大浴場に足を踏み入れたときのように、違いと言えば、辺り一面がもうもうとした湯気で覆われていないことくらいだった。「この暑さ、どうにかならないのかしらね」と手でパタパタと首元に風を送りながら真希子がうんざりしたように言う。そうやって手を動かすことで余計に暑くなるんじゃないかと和史は思った。

「仕方ないだろ、ここはこういう気候なんだから」

お決まりの返しの言葉を口にしつつ、和史の父である範久^{のりひさ}は車のトランクを開け、荷物の運び出しを始めた。

「ほら、ぼさっと見てないで手伝う」

範久に急かされ、和史は渋々ながらトランクの荷物を、二つある玄関のうち広い方の玄関から二階の部屋まで運び始める。たかだか四人と一匹が二泊三日する程度でどうしてこんなに荷物があるのか、和史にはかなり疑問だった。親戚らに配る仙台

のお土産だけでも侮れない量になっているが、それを差し引いてもちよっと多過ぎるような気がする。しかしそんな些細な疑問は、Tシャツを濡らせ始めた汗に氣を取られているうちにどこかへと消えていってしまった。

四人がバタバタと動き回っていると、一家の到着に氣が付いた和史の祖父母が狭い方の玄関から姿を見せた。祖父の名は國雄、祖母の名はフジである。

「あづいながよぐきだなあ、和史と美菜もまたおおぎぐなつてえ」

二人はしわくちやの顔を一層しわくちやにした。この程度なら和史にも何を言っているか聞き取れるが、摩訶不思議なイントネーションとアクセントはやはり彼を混乱させる。その一方で美菜はニコニコしながら「成長期だからね!」などと言っている。その天真爛漫さと言うべきか、コミュニケーションスキルと言うべきか、それは和史には無いもので、こういうとき和史は、妹が自分と血の繋がりの全くない赤の他人のように思えてしまうのだった。

運搬が終わり、ようやく家の中に上がる。玄関に置かれたケージの中に取り残される形となるれんげは、不安げな目で和史ら四人をじっと見つめた。左耳が垂れているのはいつものことだが、このときばかりはそれが孤独の不安の象徴であるかのよ

うに和史の目に映った。

「もうちょつとしたら夜ごはん持つていくから待つてね」と美菜が言い、ケージの隙間かられんげの鼻をつんつんと触った。れんげはちよつとびつくりしたように鼻を引つ込め、目をぼちくりとさせた。

広い座敷の片隅にはかなり立派な仏壇が据え置かれている。その仏壇が放つ、神々しさと禍々しさという一見矛盾した要素が入り混じった独特の雰囲気とその空間全域を支配しており、和史は座敷に上がるといつも何となく緊張感に苛まれてしまう。和史は幼い頃、その緊張感の微妙なニュアンスを何とかして両親に伝えるべく躍起になって適切な言葉を探したものの、とうとう見つけることができず、その和史の様子を見た真希子に、何をどう誤解されたのか苦笑いしながら「アイスなら後で買ってあげるから」と言われたという思い出がある。世の中の事柄には言語で表現し得ぬものもあるのだ、と和史が幼いながらも学んだ瞬間だった。語りえぬものについては、沈黙しなければならぬ。誰の言葉だっただろうか、と和史は首をひねった。

和史ら四人は、空中を忙しく徘徊している蠅と、歩きたびに小動物の断末魔のような音を鳴らす畳の床を気にしながら仏壇の前まで行き(この家が築何十年なのかは知る由もない)、毎年そうしているように、順番に蠟燭から二本の線香に火を移し、

一本ずつ線香をあげ、お鈴^{りん}を三回鳴らし、それから手を合わせた。否応なく懐旧の念を呼び起こす線香の匂いが、和史の鼻をささやかに刺激する。そうこうしているうちに夕飯を食卓に並べていたのであるう、居間からフジの「ごはんにするべ」という声が聞こえ、和史らは居間へと向かった。

毎年そうなのだが、夕飯の品数は圧倒されてしまうほど多く、今年もその例に漏れなかった。ふきのとうの味噌炒め、かぼちやの煮物、筑前煮、山椒の実とちりめんじゃこの佃煮、小松菜と油揚げのお浸し、蜂蜜掛けトマト、鰯^{はなはた}の塩焼き、じゃがいもの味噌汁。國雄とフジは七十歳を過ぎてもなお農業を続けており、畑から採れたばかりの新鮮な野菜の数々が料理にふんだんに使われている。和史は野菜が特別嫌いというわけではないのでそれはそれで結構なのだが、少し気になるのが料理の味付けだった。具体的にどうとは言えないが、普段口になっている母の作る料理とは何かが決定的に異なっているのだ。仕方なく和史はその違いを「田舎臭い」という言葉で表現している。彼の語彙はその年齢に相応しく、まだあまり豊かではなかった。

食事の最中、國雄とフジはありとあらゆる種類の質問を和史と美菜に浴びせかけた。二人は単語こそなるべく標準語に直そうと努めていたが、鹿角弁の発音とイントネーションは二人の全身の細胞の隅々にまで染み込んでいるらしく、結局はそれが

原因で和史は時折範久に通訳を頼まなければならなかった。一方美菜はと言えば、和史が理解できなかった言葉でも範久の通訳なしで容易に把握し、楽しそうに笑いながら返答していた。模範的な孫。

聞き取り・通訳の依頼・回答という一連の流れが途切れることなく続くため、和史は箸を進めることすらままならず、三十分近く掛けてようやく「ごちそうさまでした」を言うことができた。國雄とフジは、どの地域にもどの組織にも必ず一定数いる、他人との会話を生きがいのひとつに数えているタイプの人間なのだ。そのことも彼はこれまでの経験から分かっている。厄介と言えば厄介だ。

彼は二人からのこれ以上の追撃を未然に防ぐために早々と席を立ち、食器を流しに置いた。それから自分の鞆から筆記用具と夏休みの宿題である数学の問題集を取り出し、机の上に広げた。とは言え、宿題として指定されている範囲は既に解き終わっている。残るは巻末の応用問題のみだ。数学の問題を解いているときと読書をしているとき、彼は自分を取り囲む嫌な事をすべて忘れ、別の世界に逃避することができる。それがその場しのぎに過ぎず、遠からず現実に帰って来なければならぬことは重々承知の上だった。

しかしその日はなかなか問題解決の糸口を掴めず、見当違い

の式を立ててはああでもないこうでもないと思まっていた。眉間に皺を寄せて自分の書いた数式の不備を点検していると、唐突に頭を叩かれ、和史は我に返った。振り返ると、背後に美菜が立っていた。

「何回呼んだと思ってるの」と美菜はむすつとして言う。

「ごめん。で、何？」

「お風呂。後がつかえてるから早く入っちゃって」

真希子の口調を真似てそう言う美菜は、和史の知らぬ間に風呂を済ませてきたようで、薄桃色のパジャマ姿になっている。

「ん、わかった」

しかしその返事を聞いても彼女はまだ何か言いたげにしてそこから動こうとしない。和史が彼女の視線を追うと、その先にあるのは彼の数学の問題集と教科書だった。

「なんだよ、まだ何かあるの？」

「……それ」と言い、美菜は問題集と教科書を指差す。

「わざわざおじいちゃんおばあちゃんの家に来てまでやらなくたっていいじゃん。もつと他にすることはないわけ？」

他にすること？ この何もない家で？

「他にすることがないからやってるんだよ。それくらい分かるだろう」

「あるでしょ。おじいちゃんおばあちゃんとお話するとかさ。」

二人ともお兄ちゃんと喋りたがってるよ」

彼女は「どうしてそんなことも分らないの？」とでも言うように刺々しい声音で和史を責める。相手を傷付けてしまいかねないという自覚の欠如した、しかしそれでいてどこまでも瑞々しく汚れの無い刺々しさ。世の中の十一歳の少女に往々にして見られるものだ。

「夕飯のとき散々喋ったしそれで十分だろ。第一、僕は二人の言ってることが全然分らないんだ。ちゃんと二人の言葉を聞き取れる美菜が話し相手になってあげれば良いじゃんか」

相手の調子につられて和史の口調もつい怒気を帯びたものになる。今や二人の間を支配しているのは陰悪な空気だった。小さな羽虫が和史の顔の周りを飛び回り、彼は苛立たしげに手でそれを追い払う。

「お兄ちゃんはおじいちゃんとおばあちゃんの言葉を理解しようとしてないだけだよ！ だからいつまで経っても聞き取れないの！」

美菜は言うだけ言ってしまふと、あからさまに大きな足音を立てて階段を上っていった。和史は彼女のその姿を見送ると、誰に聞かせるでもなく大袈裟に溜め息をつき、痒くもない首を掻き、それから問題集と教科書を閉じた。もう今日は駄目だ。これ以上できるはずもない。さっさと風呂を済ませてしまふのが

賢明というものだ。

和史はやおら立ち上がり、パジャマとバスタオルを取りに二階へ向かった。滞在中、彼はその昔範久が使っていた部屋を充てられており、美菜は範久の姉である郁実いくみのかつての部屋を使っている。灯りこそ煌々と付いているものの、美菜のいる部屋からは物音ひとつしなかった。どうせ買ってもらったばかりのスマートフォンで友達とLINEでもしているのだろう、と和久は見当を付けた。夜遅くまでスマホをいじっているとか、そういうことで美菜はしょっちゅう真希子に叱られているのだ。

彼は再び一階に戻り、何やら話し込んでいる範久とフジに風呂に入る旨を告げると、洗面所兼脱衣所に向かい、きびきびとした動作で服を脱ぎ、熱めのシャワーを浴びた。しかしそれでも、もやもやとした感情までは流し去ることはできなかった。

理解しようとしてないだけか、と和史は湯船の中でぼんやりと考えた。確かにそれは全くの見当外れというわけではないだろう。しかし誰もが美菜のようにできるわけではない。美菜にはそのことがわかっていないのだ。和史は何となしに右手を浴槽から出し、指先から湯を滴らせ、その雫が水面上に作り出す波紋をいまひとつ焦点の定まっていない眼差しで眺めた。

翌日、相も変わらず「田舎臭い」昼食を終えると、一家はその日の夜に國雄とフジの家での集まりにやって来ないような遠縁の親戚や、範久の古くからの知り合いの家を挨拶しに回った。和史が顔を覚えていた者もいれば、初めて見るように思われる顔もあった。

ほとんどの人が和史と美菜を見て、おやおやまた大きくなっただねえというような意味のことを言った。確かに美菜の身長は去年より四センチ程度伸びているが、和史は一センチも伸びていない。百六十センチにぎりぎり届いてはいないくらいだ。統計を見る限り、和久の身長は中学二年生の男子としては平均的なのだが、成長期であるこの期間に一年で一センチすら伸びなかったことに和史は危機感を覚えている。もしかしたらこの先ぐんと伸びるのかもしれないが、むしろこのまま成長が止まってしまう可能性の方が高いような気がしていた。俗説なのであまり期待はしないが、カルシウムを多く摂って運動を沢山した方が良くのかもしれない、と和史は訪ねた家でも出された旧時代の遺物のようなカステラをゆつくりと咀嚼しながら考えた。

概ね挨拶を終えて再び祖父母の家に戻ってきたときには、和史は既にくたくたになってしまっていた。それは真希子も同じであるようで、「これからお墓参りに行くのよね……」などどぶつぶつ言いながら、一家の帰りを待ち侘びていたれんげの顎の

下をくすぐるようにして撫でている。れんげは満更でもないように、いつもはぴんと立っている方の耳を横に倒し、気持ち良さそうに目を細めていた。今にもゴロゴロと喉を鳴らしそうだ。しかしれんげは犬であって猫ではないから喉を鳴らしはしない。残念なことだ、と和史は思う。

美菜は「暑い暑い！」と甲高い声で喚き立てながらリビングへと走り、あたかもそれが当然の権利であるかのように扇風機の目の前の位置を占領した。肩まである彼女の焦げ茶色の柔らかい髪の毛が扇風機の風になびいている様子は、まるで髪の毛自体が自我を持った生物のようで、和史は少し不思議な気分になった。普段ならそんなくだらない発想はしない。たぶん暑さと疲れとで思考回路がちよつとやられてしまっているのだろう。彼はフジに断りを入れ、冷蔵庫を開けて麦茶を取り出し、グラスに氷を数個放り入れる。グラスと氷がぶつかり合うことで生み出された音は、どこまでも澄み、どこまでも鋭く、そしてどこまでも冷たい。和史はその音だけで周囲の気温がいくら下がったような錯覚を覚える。しかし彼が必要としているのはそのような虚構ではなく、実際に冷たいものを体内に取り入れることだった。コップを口元に運び、勢いよく麦茶を喉の奥に流し込む。和史はそうしてやっと思をつくことができる。

和史と美菜はおの好きなように涼んでいたが、和史にと

つては嘆かわしいことに、ほんの三十分もしないうちに一家はフジと國雄も伴つて墓参りの為に家の外に出ることになった。真夏と言えど夏至からは幾分日が経っているため、五時過ぎには太陽も大きく傾いており、強烈な西日が墓地へと続く下り坂を執拗なまでに焦がしていた。れんげも相当暑いらしくずっと舌を出しっぱなしなので、まるで笑っているみたいに見える。これだから嫌なんだ、と辟易し顔を顰める和史のこめかみにも汗が滲み始め、早々に帰りたい気分を抑えられずつい「わざわざこんな暑い時期に墓参りなんてしなくていいのに」と日本の風習に対して疑義を呈するような発言をしてしまったが、それに答える者は誰もいなかった。ただただ言葉だけが宙に浮かび、やがて橙色の日光に晒され呆気なく蒸発していった。

雑草の生い茂る、半ば獣道のような道を通つて脇の入り口から墓地へと入る。斜面に沿つて何百もの墓が並ぶ光景は非常に壮烈なもので、毎年來ているにも関わらず和史はすっかり氣圧されてしまう。同じように墓参りに來た人々が、至る所で目を閉じて手を合わせたり、墓石に水をかけたりしている。墓地を取り囲むようにして聳え立っている数多の太木の枝々には、供え物を狙う狡猾なカラスたちが止まっている。彼らの大合唱は、人々の話し声よりも、雌を呼び寄せんとする必死の蟬の鳴き声よりも、遙かにその空間において支配的だった。

本郷家の墓はこの広い墓地の、どちらかというと隅の高台の方にあった。勾配が急でなおかつ狭い道を通らないとそこに辿り着くことはできず、八十を目前に控えた國雄とフジにとつてはやや過酷すぎる道のはずなのだが、二人は文句ひとつ言いもせず黙々と歩を進めていた。やがて墓の前に着くと、家から持ってきた薬缶の水で墓石の汚れを落とし、赤飯とお菓子を供え、線香をあげ、それから全員で——もちろんれんげは除いて——目を閉じて手を合わせた。その間れんげは行儀よくお座りをし、遠くの木の上のカラスたちを不思議そうに眺めていた。

数秒の沈黙の後、和史が目を開け、何気なく横を向くと、遠くの方に純白のワンピースを着た髪の長い少女がひとりで佇んでいるのが見えた。こんな場所で自分よりも小さい子供がひとりであるのは珍しい。親とはぐれたのだろうか。ここはとても広いし意外と道が入り組んでいるから有り得ないはないな、などと彼が考えていたとき、不意にその少女が振り向いた。和史と少女の間には直線にして百メートル超の距離があつたが、それにも関わらず和史は間違いない少女と目が合ったという確信を得た。遠くからでも分かる彼女の奇妙に光を失った目は、ある種の鋭さで以て和史の目を射抜いていた。数秒か、数分か。どれくらい時間が経ったのか彼にはまるで分からなかったが、少女と向き合っている間、彼の周りの世界は音も色も何もかも失い

完全に停止していた。やがて少女は振り向いたときと同様に何の予兆も前触れもなく和史から視線を外し、落ち着いた足取りで墓地の出口に向かって歩き始めた。

和史は明確な理由もなく、ただ直感的に彼女を追わなくてはならないと強く感じた。彼女が和史のことを呼んでいたわけでもないし、白いワンピースの長髪の少女という存在に特別思入れがあるわけでもない。それなのに、彼の中の何かが「決してその少女を見失ってはいけない」と狂わんばかりに叫んでいた。

「ごめん、先に家に戻ってて」

言うやいなや、和史は真希子の困惑の声も無視して少女が去って行く方向へ走り出した。全力疾走など体育の時間の五十メートル走のとき以外には滅多にしないうえ、決して足場の状態も良くないため、何度も足をもつれさせて危うく転びかける。階段を下りきったところで見知らぬ男の子にぶつかりそうになり、その親と思われる人物から抗議の声が上がったが、構っている余裕などなかった。和史はそちらを向きもしないまま「すみません！」とだけ大声で言い、再び走り出す。ちょうど少女が墓地から出て見えなくなるところだった。

「待って！」

思わず叫んだ和史の声も少女の耳に届いているかどうか定かではない。何事かと和史を見る無関係な人々の視線に晒されな

がらも、突然の運動に悲鳴を上げる肺に鞭を打って彼は出口へと急いだ。ようやく墓地の出口に辿り着くと、彼は少女が歩み去った方角を確認する。既に少女の姿は見えない。辺りは住宅街のようになっており、家々を囲むブロック塀が立ち並び、見通しが悪い。未だ諦めきれず勘に従って少女を探し回ったが、結局その努力が実を結ぶことはなかった。彼が搜索を打ち切ったときには既に太陽は姿を消し、蒸し上げられた大地がその熱を空中へと逃がし始めていた。

家に戻ると真希子と美菜に何をしていたのかと散々詰問されたが、和史は適当に言葉を濁して上手く躲した。そのような技能は意識的に習得できるものではない。和史は自分でも分からないうちに言葉巧みに答えをはぐらかすことができるようになっていたのだ。これも一種の処世術だと和史は考えた。

その日の夜は、年に一度の、親族が大集結しての宴——和史が勝手に宴と命名した——が開かれることになっていた。範久の姉夫婦とその子供二人、兄夫婦とその子供一人、弟夫婦とその子供二人、そして独身の妹。和史の一家とフジ、國雄を合わせて総勢十八名の大所帯である。台所ではフジが着々と「宴」の準備を進めていた。同時にいくつもの料理を並行して作っていく

その動きは年齢を全く感じさせないほどきびきびとしたもので、毎年真希子が手伝いを申し出るたびにフジがそれを断っているのも、決して虚勢を張っているのではなく、実際に手伝ってもらう必要性が無いからなのだ。それに、フジにとってみれば真希子も来客の一人であって、来客をもてなすための料理を作るのを彼女に手伝わせるなど言語道断だと考えている様子だった。

美菜はバラエティ番組を適当に眺めながら夕食が出来上がるまでの時間を潰している一方、和史は学校の図書室で借りた川端康成の『千羽鶴』を読んでいた。しかし、名前も知らないあの少女の、夕陽を浴びて美しく揺れる黒髪が、周りのものを全て無に帰してしまいそうなほど白いワンピースが、和史の方を振り向いたときの何かを仄めかしているような表情が、脳裏に浮かび上がっては消えを繰り返し、全く物語が頭に入ってこなかった。同じページを頭から終わりまで三度ほど目で追い、これは無理だと諦めて本を閉じたその瞬間、インターホンが鳴った。

最初に到着したのは範久の弟夫婦一家だった。四歳の竜太と六歳の遙花が真っ先に飛び込んできて「おじいちゃんおばあちゃん久しぶり！」などと言って大声で騒ぐのを、「お料理の邪魔になるから静かにしなさい！」と母親の由紀絵が同じくらい大きな声で制止しながら登場し、それから申し訳なさそうな顔をしながら範久の弟である拓朗が現れた。どちらかと言えばがっ

しりとした体格をしている範久と比べると、拓朗は少々体が細く頼りない印象を与えるが、芯の強そうな瞳と外国人のようにすっと通った鼻筋は瓜二つだ。

「やあ兄貴、調子はどう？」

「可もなく不可もなくつてところだ。そっちは？」

「似たようなものさ。お陰様で子供らも由紀絵もうるさくて」

「誰がうるさいつて？」

意外と耳聡いのか、子供らと一緒に國雄とフジに挨拶していた由紀絵が拓朗を睨む。余計なこと言うんじゃないわよ、と目が語っている。

「はは、夫婦喧嘩は余所で頼むよ」

「あらどうもすみません、範久さん。真希子さんも。ご無沙汰しております」

由紀絵が少し照れたように笑って言うと、真希子も立ち上がって柔和な笑みを返す。

「お久しぶりです。髪型変えられました？」

「そうなんですよ。もう年齢も年齢だし、せめて髪型だけでもおばさん臭くないようにしようと思って」

一連のやり取りは全て聞こえてはいたが、和史は再び本を開いて物語に没頭しているふりをした。彼は由紀絵に対して苦手意識を持っていた。彼はそこまで親しいとは思っていない相手

とはそれ相応の距離を取っていたタイプなのだが、由紀絵は逆にどんな相手にも持ち前の人懐っこさで初めから距離をぐいぐいと縮めてくるのだ。以前それで和史はどぎまぎしてしまっただけがあり、それ以来なるべく彼女のことは避けるようになっていた。

にわかには騒がしくなったな、と和史は思った。竜太と遙花は美菜と一緒になにやらきやあきやあ言っているし、彼らの両親と和史の両親は近況報告と世間話に花を咲かせている。喧噪に囲まれて座っていると、自分が見当違いの時間に見当時間の場所にいるような感覚が一層強まった。耳に入るあらゆる言葉が奇妙に現実感を欠いていて、どこか架空の土地から風に乗って運ばれてきたかのようなだった。次第に和史は耐え難い居心地悪さを感じ始めたが、彼が何らかの手段でその場を抜け出そうと試みるよりも早く、範久が彼の様子の変化に気付いた。

「どうした和史。具合でも悪いのか？」

「少しのぼせたみたい。ここの空気微妙に澱んでるし。ちょっと外の空気に当たってくる」

そう言うと、和史はいかにも体調が芳しくないといった様子を装い、しかし不自然にならない程度に足早に玄関に向かった。都合良く勘違いしてくれたことについて内心範久に感謝しながら外に出ると、ちょうど強い風が吹いて和史の前髪を揺らせた。

思わず目を細める。ついさっきまではほとんど無風状態だったのに、と和史は思いを馳せ、急激な変化の中に何か予兆の欠片のようなものを探り当てようとする。言うまでもなくその試みは失敗に終わる。抽象的な問いには抽象的な答えしか与えられない。もし答えが何かしらの形で現れていたとしても、必ずしもそれに気付くとは限らない。何という小説だったか、そのような旨の文を読んだ記憶がある。ずっと庭先で突っ立っているのも退屈だと思い、和史はしばらく適当に歩き回りながら可能な限り時間を潰すことに決めた。

歩いてすぐのところにある際立つて小さな民家は、ほんの数年前まで駄菓子屋だった。その名残に、かつて看板をつけていた部分だけが、風雨に晒されていなかったぶん周囲と比べると僅かに色が明るくなっている。和史は小さい頃――まだこの帰省を非日常の楽しみとして捉えることができていた頃――フジに貰った百円玉を無邪気に握り締めて駄菓子屋へと入り、店主ととりとめのない話をし、目を輝かせてどれを選ぼうかと散々迷ったものだった。そんな思い出も今は遙か遠く色褪せ、ほとんど意味を持たないものとなってしまっている。ちょうど水の流れが土壌を抉っていくように、永い歳月の流れによって削り取られてしまったのだ。

更に坂を下っていくと、他家よりは随分見栄えが良い新し

めの民家が見えてくる。そこは長いこと空き地だったのだが、何年前だったろうか、この場所に突如としてその家が出現していた。もちろん実際には急に現れ出たのではなく、然るべき手順を踏んで徐々に大工たちの手によって造り上げられたものなのだが、一年に一度しかここを訪れない和史はその過程を目撃することができない。そのため、最初にその家を見たときも、和史は強烈な違和感を覚えることになった。その家はまるで何かのジョークのように彼の目には写った。どう好意的に考えても周囲の風景に馴染んでいないし、その家自身もなんだか肩身の狭い思いをし、申し訳なさそうに縮こまっているようだった。今では彼も、その家が本来持ち合わせている威容を十分に示しながらそこに鎮座しているように感じられる。何事も慣れた。

そこで彼は、自分がいつもより幾らか思索的で瞑想的になっていることと、自分の足が無意識に墓地へ向かっていることを自覚する。墓地へ行けばあのワンピースの少女の姿をまた見つけることができるかもしれないという根拠のない淡い期待を抱いているのだ。いつもの和史なら、馬鹿馬鹿しい、とすぐさま唾棄する類の非現実的な期待なのだが、その日だけはいつもと違った。捨ててしまうのが惜しい。ここまで来て逆らうことはできない。和史には痛いほどにそのことが分かっている。一度波に吞まれ流されてしまったら、あとは見苦しい抵抗は直ちにや

めて大人しく流され続けるのが一番良いのだ。足掻いたところで、ただ無駄に疲弊するか、状況を悪化させるか、疲弊した上で状況も悪化させるかの三択しかない。

警戒心を剥き出しにした姿の見えないどこかの飼い犬の吠える声に急ぎ立てられるようにして、和史は夜の墓地へと足を踏み入れた。夕暮れ時とはまた違って、湿っぽさが幾分増しているようだ。あれほど煩かったカラスも蝉も嘘のように沈黙しており、静寂が土に染み入る水のように空間をじつとりと濡らしていた。哀愁と陰惨の入り混じったような気配を全身に感じながら、彼は首を忙しく動かす。しかし、どこにもワンピースの少女はいない。それでも、わざわざここまで来たのだからと歩き出そうとした刹那、あなた、と後ろから呼ぶ声がした。和史は飛び上がりそうになるのをなんとか堪え、恐る恐る後ろを向くと、そこには微笑を湛えた婦人が立っていた。白いブラウスの上に薄緑のカーデイガンを羽織り、丈の長いベージュのスカート。暗がりでも分かるほどに白く透き通った肌。片田舎の墓地にはおよそ似つかわしくない。艶やかな長い髪は背中の半分ほどにまで到達している。シャンプーのCMに出演しているもおかしくなさそうだと彼は心の中で思った。眼はどちらかというと離れ気味だが、それがかえって思慮深そうな印象を与えている。鼻は高く、唇は薄い。注意深く観察しなければ気付かない

程度の小皺が幾らか見られる。和史の推測では四十歳前後というところだった。ただ、どちらかと言えば、やや老けた三十五歳というよりは若々しい四十五歳のほうがしつくりとくる。

「夜にひとりでこんなところに来るなんて、何か事情がお有りのようね。どうしたのかしら？」

その言葉を聞いた途端、和史はひどく不愉快な気持ちになった。いくら自分が子供だからって、いきなり初めて会った人のプライベートを詮索するような言葉を投げかけるなんて、この人には常識というものがないのだろうか、と。和史は不快感があまり露骨に表に出ないようにはしつつも、律儀に答えてやる必要もないと思い、「いえ……」とだけ返事をした。

「あら、ごめんなさい。無作法にも程が合ったかしら。赤の他人に突然話しかけられたのでは警戒して当然よね」

婦人はふっと小さく笑ってから、その場を仕切り直すかのように表情をやや硬くした。

「あなたのことは置いておいて……。少しお尋ねしたいことがあるのだけれど、この辺りで白いワンピースを着た髪の長い女の子を見掛けなかったかしら？」

「白いワンピースの……？」

声音に焦りが滲まないようにしたつもりだったが、和史は上手く隠せている自信がなかった。どうしてこの人があの少女のこ

とを探しているのか。彼女とどういう関係にあるのだろうか。

僕が彼女を探していることを知っていて訊いているのだろうか。様々な疑問が一瞬の内に頭の中を駆け巡り、彼は言葉を上手く続けられなかった。婦人は僅かに目を細めて和史の挙動を観察していた。

「その様子だと、何か知っているみたいね」

「知っていると言うほどでは……」

「ついてきて。話を聞かせてほしいの」

婦人は和史の言葉を遮ると、くると背を向けて歩き始めた。どう考えても怪しい。ついていくべきじゃない。そう思いはしたものの、ここで彼女についていかなければ、少女の件が永遠に謎のままになってしまうのもまた確かだった。和史は少し逡巡したのち、彼女の後ろについていくことにした。和史自身としてはあまり運命などという非科学的で曖昧なものの存在は信じたくなかったが、この出来事もまた「波」の一部なのだと思うほかなかった。流された先に待ち受ける物は何なのか、一体どこに辿り着くのか自分の目で確かめなければならぬ。

二人は墓地から出て和史の祖父母の家とは反対の方向へしばらく歩き、一軒の家の前で立ち止まった。

「ここが私の家」

そう言う婦人の声には自分の家への愛着といったものは全く

含まれていないようだった。どちらかと言えば洋風寄りだが、他の家と比較して特に変わった点はなく、ただただ質素で实际的で平凡だった。玄関の扉の脇には黄色い花が植えられた鉢がいくつか置いてある。くすんだ黄金色を呈した真鍮製の表札が控えめに掲げられている。イタリック体でFUSHIKIの文字が彫られていた。和史が玄関に入るのを躊躇していると、婦人は「ご遠慮なく。どうぞ上がって」と彼を促した。

家の中はベージュを基調として全体的に落ち着いた雰囲気です。統一されており、婦人が上品で洗練された趣味の持ち主であることを如実に物語っていた。木製のシューズボックスの上には、ブレーメンの音楽隊をモチーフとした木彫りの置物や、剥製と見紛うほどリアルな真つ白なフクロウの置物が並べられている（婦人が「みんなそれを見てびっくりするけど、剥製ではないのよ」と言わなかったら和史は間違いなく誤解していただろう）。和史は今自分が置かれている状況を束の間忘れそれらに見入り、概ね好印象を抱いたが、少し気になるところがあった。まるで全てがつい昨日家そこに置かれたばかりのように、塵ひとつ落ちていないのだ。汚れと呼ばれうるあらゆるものが一切排除されている。それは、婦人の神経質的な気性の為せる業というよりは、むしろこの場所この空間が目に見えない何かの力によってその聖性を保たれている結果と言った方が真実に近そうだった。

た。

ふと我に返ると、和史は婦人が少し不思議そうな目で自分を見ていることに気付いたので、小さな掠れた声でお邪魔しますと言いながら慌てて靴を脱いだ。自分が目も当てられない失態を犯したような気分になり、耳が少し熱くなるのを感じた。耳が髪で隠れていて良かった。

和史が通されたリビングもまた、玄関に入った瞬間に受けた印象を全く覆すことなく、隅々まで清潔で品が良かった。アイデア界にしか存在し得ないはずのものが、ある種の奇跡が重なって偶然この世のこの場所に現れ出でたかのようだ。婦人はソファに腰かけるよう和史を促したが、自分がソファに触れることが引き金となつてこの完璧な調和が不可逆的に失われてしまうような気がして、彼は少し躊躇してしまった。

「ごめんなさい、紅茶かコーヒークらいしか無くて……。どっちが良いかしら」

「えっと、じゃあ紅茶で」

「お砂糖は入れる？」

「はい、ちよつとだけ」

耳の痛くなるような静寂の中、婦人は自分と和史の分の紅茶を淹れ、テーブルの上にカップを置いた。一連の動作には神秘的と言つて差し支えないほど音が伴っておらず、まるで何事

においてもなるべく音を立てないよう細心の注意を払うのが彼女にとって是最優先事項であるかのようにだった。和史は妙に緊張してしまい、そのせいでカップを手にとってごく普通に紅茶を飲むのもままならなかった。温かい液体が食道を下り胃袋に到達する感覚が普段とは決定的に異なっている気がして、一口飲んだだけでそれ以上は積極的に飲むとは到底思えなかったが、紅茶が口に合わなかったと誤解されるのは和史の歓迎するところではなく、曖昧で自信のない声で「美味しいです」と口走ってしまった。和史の声は、まるでその紅茶が全く美味しくないのに無理をしてそう言っているような響き方をした。婦人は特別その言葉には反応を見せず、自分のカップの中の紅茶を、航空整備士が入念に飛行機の点検を行うときのような目つきで見つめていた。結果的に幾らか気まずい雰囲気になってしまったようで、彼はすぐに不用意に言葉を発したことを後悔する羽目になった。やがて婦人は自分の淹れた紅茶に不完全な点が存在しないことを確認し終え、和史と目を合わせ、一瞬の間を空けてから明瞭な発音で話し始めた。

「さて、本題に入る前にまず私について話そうと思うの。本題というのはさっき私があなたに尋ねた女の子のことだけど、私のことを話せば自然な流れでその本題に行き着くし、結局それが一番の近道なんじゃないかしら。それで構わない？」

「構いません」

質問の形を取ってこそのいたものの、それは実質的には質問ではなかった。少なくとも、和史には「構いません」以外の答え方を見つけ出すことができなかった。もう全ては動き出しているのだ。

私は今から四十一年前の二月七日、福井市の病院の一室で生まれた。出産予定日は一週間も先だったから油断していたら突然陣痛が始まって、しかもその日は大雪で交通渋滞が酷くて。タクシーを呼んだけどなかなか進まなかったから、間に合うかどうかかなり微妙でとても焦ったという話を、母親から飽きるくらい聞かされたわ。その状況の大変さは想像に難くないけど、当時母親のお腹の中で今にも外の世界に飛び出さんとしている赤ん坊の私にはどうしようもないわよね。まあ結果としてはなんとか間に合って、私は母親と助産師さんの見守る中で無事に最初の泣き声を上げることができたわけだけども。

その後私は特別大きな怪我も病気もせずに、両親の愛情と庇護の下ですくすくと育った。私には兄弟姉妹は一人もいなかった。

たし、両親はどうやら私一人で子供は充分だったようね。小学校に入ると、両親の勧めで色々習い事をやったわ。ピアノに水泳、習字、バレエ……。でも、どれも長続きはしなかった。ある段階まではすんなり上達するのだけれど、どうやってもそれ以上先に進めないのよ。ある地点まで行くと突然大きな壁が立ちはだかって、私は何をしてもその壁を越えることはできない。そこで永遠に立ち止まっているしかない。器用貧乏という言葉は私のために作られたんじゃないかと結構本気で疑ったわ。

理不尽で圧倒的な障害物に阻まれることなくどこまでも進める道、それを示してくれる存在が現れたのは、私がもう努力したって何もかも無駄だと諦めかけていた頃だった。具体的には、小学六年生の夏ね。早くも諦観の境地に至った十二歳の少女——ぞつとしないわ。まあ、それは置いといて。全国どこの小学校もきつとそうだと思うけれど、夏休みの宿題に読書感想文が出されたの。私、あれが本当に大嫌いだった。だって、本を読むという行為を通して得るものは、全部自分という人間の心のシステムに直結しているわけでしょう。どうしてそれを文章にして提出することを強制されなければならぬのか、全く理解できなかったわ。それってほとんど自分の心を取り出してメスを入れて、中の構造を「ほら、こんな風

になっているんですよ」と言うようなものよ。だから、せめてもの反抗として私は読書感想文は何から何まで虚構で作り上げることにした。多かれ少なかれ、誰もが読書感想文には嘘を織り交ぜると思うけれど、私の場合、それは生半可なものじゃなかった。まず、私自身とは全く異なる経歴や人格、思考パターンを持った架空の人間を頭の中で組み立てる。出身地から、家族構成、趣味、好きな食べ物、そういった色んなことを緻密に抜かりなく設定していくの。そして、その人がこの本を読んだら一体何を感じ、また何を感じないのだろうと想像を逞しくして感想文を書き上げたの。

たぶん先生は気が付かないだろうし、気付かれた場合でも精々ちよつと違和感を持たれる程度だろうと高を括っていたわ。だから、帰りの会が終わった後に、「読書感想文のことでお話があるから掃除が済んだら職員室に来て下さい」と言われたときはもう心臓が破裂するんじゃないかと思ったわね。自分への怒り半分、読書感想文なんて下らないものを書かせるこの社会への怒り半分といった感じで、怒られるのを覚悟して職員室に行ったら、なんと先生は、かなり控えめではあったけど、私に笑いかけてきたのよ。そして、開口一番「文章を書くのは好き？」と。どうして先生はそんなことを尋ねてくるのだろーと思いつつ、私は「嫌いではないです」とかなん

とか、正確なところは忘れたけれど、差し障りのない返事をしたわ。すると先生は「伏木^{ふしき}さんは小説家の資質がある」と言うの。私はもう何が何だか分からなくて、気の抜けた声で「はあ……」と答えるしかなかった。

先生——土橋^{どばし}先生の話は簡単にまとめるとこういうことだった。つまり、私には架空の人間を完璧に想像／創造することが出来る稀有な才能がある、その才能を最も生かすことができるのは小説家だ、文章は年齢のせいもあってまだ拙いが、それは今後努力を積んでいけばいくらでも改善できる。そんなことを言われたのは初めてだったから、すごく戸惑ったわ。でも、それと同時に、「確かに、私は小説家に向いているかもしれない」というある種の確信——いいえ、そこまで大袈裟なものじゃないかしら。とにかく、腑に落ちるものがあったの。小説家になった自分の姿を、漠然とではあるけれどイメージすることができた。だから、試しに私はやってみることにした。当面の目標を、小説家になることに設定したの。今度こそ、壁を越えられるかもしれない。同じ道をずっと進んだその先にある風景を見ることが出来るかもしれない。そう思ったから。

まず最初に、土橋先生のアドバイスに従って、たくさん本を読むことから始めた。古代ギリシャの叙事詩からロシアの

古典小説から現代日本の評論まで、古今東西ありとあらゆる本を読んだわ。もともと活字を読むのは嫌いじゃなかったから、苦痛ではなかった。本を読んでいくうちに、私は世界には実に様々な人間や思想がかつて存在していたこと、今存在していること、これからも存在し続けるであろうことを知った。それは本当に素晴らしい発見だった。本を読むことは私にとって冒険であり、挫折であり、恋愛であり、戦争であり、希望だった。それと並行して、私は先生から課される課題を次々とこなしていった。誰々の小説の前日譚を書けとか、ある人物の一生を小説にしろとか、そういう課題よ。本当にきつかったけれど、その経験が血となり肉となって今の私を作っているのよね。

小学校を卒業したあとも土橋先生は私の先生であり続けた。どうしてこんなに熱心に私を教えてくれるんだろうと疑問に思ったこともあったけど、たぶん自分の挫折した夢を私に託していたんだと思うわ。いつだったか、「私も小説家になりたかった」とちらと仄めかしたことがあったから。そして課題に取り組み始めてから大体三年が経ったころ、先生に「私から教えることはもう何も無い。学ぶべきことは全て学んだと思う。自分の創作活動を始めなさい」と言われたの。驚いたし、突然見知らぬ土地に放り出されたような気分になって、とて

も悲しかった。でも、先生の言う通り、もうこれ以上この方法で学ぶことはないと感じ始めていた。だから、私は了承した。それに、先生のその言葉がきっかけになって、心の奥深くでじつと息を潜めていた炎がぱつと灯ったのが自分でもよく分かった。

それから一か月の間、私は書いて書いて書きまくったわ。一体どこから湧いて出てくるんだろうと怖くなるくらい、底なしにイメージが溢れてきた。そのイメージを一雫も漏らさないように、せっせとワープロで言葉を紡いでいった。そうして必死の思いで書き上げた長編小説を、先生とも相談して、とりあえず一番規模の大きな新人賞に応募することにした。そうしたらそれがいきなり賞を貰っちゃったの——自慢話があったわけではないのよ、気を悪くしたらごめんなさい。誰が一番驚いたかって、私が一番驚いたわよ。まさか本当に賞が獲れるだなんて。受賞の連絡が来たとき、あんまり驚いて腰を抜かしちゃったわ。喜びが込み上げてきたのは少し時間が経ってからだった。ついに私はやったんだ、何をしても越えることのできなかった壁を私はとうとう打ち破ることができたんだって。今も昔も私はそう簡単には泣かないタイプの人間なのだけれど、そのときばかりは幾ら流しても次々と涙が出てきて、このままじゃ冬の枯れ木みたいになるんじゃないや

いかと思ったのを覚えてるわ。

でも、そのときの私は事の重大さをちゃんと理解できていなかった。世間は、受賞最年少記録を大幅に塗り替えた天才文学少女ということで私に関する話題で持ちきりだったの。受賞したということはつまり、受賞会見がどうか、ありとあらゆるマスメディアからの取材要請とか、そういった類のことがひっきりなしに続く日々の幕開けを意味していた。そんなことになるなんて私は想像もしてなかったし、人前に出るのが私は嫌いだった。それに、母から聞いたのだけど、私の作品をこつ酷くこき下ろす批評家も、そう多くはないけれど確かにいるようだった。私が当時十五歳だったという点に着眼して、訳の分からない理屈で私の作品のみならず私という人間そのものを否定する、心無い人も現れ始めたわ。人々の好奇の目や不合理な悪意に晒されるのに慣れていなかった私はもう怖くて仕方なくて。だから私は一切公の場には姿を見せないことにしたの。いわゆる覆面作家というやつね。しばらくの間は騒がしいままだろうけれど、人は同じ話題にそう長くは関心を持ってはいられないし、最後にはみんなあなた顔を出さないことを認めてくれるはずだ、と母も土橋先生も慰めてくれた。実際、私は覆面作家としての地位を確立することに成功したわ。今でも私は小説を書き続けているけれ

ど、出版関係者と個人的に親しい間柄の人たち以外は、誰も私が「眞水鏡子」であることを知らない。案外うまくいくものね。たった今その名前のリストにあなたが加わったことになるけれど。

まあそれはそれとして。話を続けましょう。

ほとぼりが冷めて、ひとまず安心できるようになってから、私はこれからは小説家としての人生を送っていこうと決心したわ。やっぱり文章を書くことに確かな手応えを感じる事ができたし、物語をこの手で生み出すことに、他の何を以てしても代えられない愉楽を見出していたから。私は小説家になり、大体一年に一冊のペースで本を書き上げていった。短編も長編もたくさん書いたわ。書けば書いたぶんだけ本は売れたし、小説家としての名声も着実に築かれていった。世間では私の書いたものに対して色々な反応が見られたわね。でもそういったものに私は興味がなかった。私はあくまで私自身のために書いているのであって、世間の皆さんに対して書いているわけではないの。もちろん、人々が私の書いたものに関心を寄せなくなったら生活が立ち行かなくなるといふことは分かっているつもりだけど。

まあ、何はともあれ、そういう風にして私はひとつずつ歳を重ねていったわ。生きるといふことは様々な困難に直面する

ということでもある。これは私に限った話ではなく、一般論よ。思い返すと本当に色々なことがあった。でも今は残念ながらら割愛させて頂くわね。時間は無限にあるわけではないし、流石にあなたもいつ本題に入るんだと焦れてきたことでしょうか。

私が冴佳と——そう、あなたが姿を見かけたはずのあの子と宿命的な出会いを果たしたのは私が三十八歳のとき、つまり今から五年前ということになるわね。宿命的、と言ったけれど、これは全く誇張ではないわ。何者かの意思——それが何かなんてことは見当もつかないし、神様の実在も信じてはいないけれど、そうとしか表現できないものが私とあの子を引き合わせたのよ。それくらい劇的な出会いだった。あの子を一目見たとき、私の根源的な部分が激しく揺さぶられるのを感じた。あの感情は、轟く雷鳴よりも、鳴動する大地よりも、ずっと圧倒的で絶対的で、いかなる比喻も受け付けられないものだった。……ごめんなさい、つい感情的になってしまった。どこでどのようにして出会ったのか、まずはそれを話さなくてはね。

最初に、当時私を担当していた編集者の渡會さんから冴佳の話聞いたわ。冴佳は不幸な事故で既に両親を亡くしてい

て、引き取って世話をしてくれるほど親切で裕福な親戚もいなかったから、児童養護施設に入っていたの。渡會さんも冴佳の遠縁で、だからこそ彼女のことを知っていたのだけど、「やっぱり女の子一人を更に養うほどの余裕はうちにも無くて……」と仰っていたわ。まあ、それだけならただの痛ましいお話で終わりなのだけど、渡會さん曰く、「冴佳ちゃんの文学的素質には目を見張るものがあります。まさに天与の才というやつですね」と。なんでも、彼女は施設で日がな一日詩の創作に耽_{ひた}っていて、その詩というのも弱冠八歳の少女が書いたとはとても思えないものらしかった。そういった話を聞きつけて、興味を抱いた渡會さんは施設に直接連絡して、ファックスで彼女の詩を送ってもらった。そしてそれを彼が実際に読んでみたら、確かにこれは間違いない、本物だ、と。渡會さんの言葉をそのまま借りれば、「磨けば光る原石どころの騒ぎじゃない、磨く前から既に輝きを放っている」ようなレベルの詩だった。そして彼は「もしお時間があれば伏木さんにも目を通して頂きたいのですが」と私に言ってきたの。渡會さんの眼には鬼気迫るものがあつた。正直私は、その時点ではあまり信じていなかったわ。もっと正確に言えば、渡會さんが私の気を引くために誇張しているんじゃないかと疑ったの。でも、そこまで熱烈に頼まれたらノーと言うわけにもいかな

いし、結局承諾して、次の日にプリントアウトした冴佳の詩を持って来てもらうことにした。どっちにしろ読むだけなら大した労力でもないしね。それで、実際に読んでみたら、それはもう本当に凄まじいとしか言いようのない代物だった。曲がりなりにも私は小説家なのだから、もつと的確に適切に彼女の詩がどんなものか説明できれば良いのだけど……。溢れんばかりの情緒や感性と、それを言葉に置き換えられる鋭利で一分の隙もない発想と。確かに、渡會さんの言葉には一片の嘘も誇張もなかった。詩は専門外の私でも、心に、いいえ、全身の細胞のひとつひとつに切に訴えかけてくるものがあるのはあまりに明らかだった。当然の帰結として、私は時田_{ときた}冴佳という一人の人間のことをもつとよく知りたいと思つたわ。こんな詩を書くことのできるのは一体どういう女の子なのだろう、と。だから、私は渡會さんに頼み込んで、どうにか彼女と直接会えるように取り次いでもらったの。血縁者でもなんでもない私が本当に冴佳に会えるのか少し不安だったけれど、これが案外すんなりいった。「冴佳ちゃんに訊いてみたところ『別に会つても良い』そうですので、私どもがそれを拒む権利も必要性もございません」というのが施設側の回答だった。一週間後、私は電車を乗り継いで冴佳のいる児童養護施設へと向かった。その日は朝から晴れたり曇ったりを繰り返し

ていて、不安定な気候だったのをよく覚えてるわ。それに、暦の上では真夏だったのに、奇妙なくらい風が涼しかった。施設は思っていたよりも立派で清潔で、中に通してくれた職員の対応もとても丁寧だった。冷房のひときわ効いたこぢんまりとした部屋に連れられて、こちらでお待ちください、今冨佳ちゃんを連れてきますねと言われた。会うとは言っただ、黙々と詩を書いているところを遠目に見るくらいのつもりでいたから、まるで何かの面談みたいな状況に私はちよつと狼狽えたわ。本人を目の前にしたら、私は何を、どんな言葉が発するべきなのだろうと考え始めてまもなく、職員の方が冨佳を連れて戻ってきた。

一目彼女を見たときの私の衝撃といったら……。さつき言った通りなのだけど、改めて表現するとしたら——そう、まるで万物の創造の瞬間に立ち会ったような気分だった。あるいは、私を取り巻くこの世界の全てが一瞬にして崩れ去って、そしてあつという間に再構築されたかのようなだった。……こんな主観的な形容じゃ何があなただかあなたには分からないわよね。なるべく偏見を排して客観的に言う——冨佳は美しかった。そう、美しかったの。それも薄っぺらい商業的な美しさではなかった。彼女は凜としていて、不可侵的で、透き通った水晶のようなだった。でもそれは同時にひどく不安定で脆いも

のようにも見えたわ。何か異物が、水晶を濁らせ曇らせる不純な物質が入り込んだら瓦解してしまう、きわめて微妙なバランスの上に成り立っているみたいだった。あるいは真の美しさというのはそういうものなのかもしれないけれど。駄目だわ、やっぱり客観的に説明することなんてできない。そういうタイプの美しさなのよ、きっと。それで納得するしかない。

私は彼女にいくつか質問をした。どうして詩を書くのか、あなたにとって詩作という営みはどういう意味を持つのかとか、そういうこと。でも冨佳は、私の質問に対して困惑し、途方に暮れているようだった。いくら素晴らしい詩を書くとは言え彼女はやっぱりまだ八歳の少女だった。それに、彼女は自分の切れるような美しさを持て余していた。無口で思索的、どこか陰のある、けれど年齢相応のあどけなさを纏った女の子だった。満足のいく回答は得られなかったけれど、その時には私はもう決心していた。いや、決心しなければならなかった。最初から決まっていたことなのよ。私は、冨佳を養子にする。心の中でそう何度も反復した。まるで反復すればするほどその実現可能性が高まっていくかのよう。彼女の美しさと詩の才能は護られなければならないというのは確かに私が彼女を養子にする大きな理由のひとつではあったけれど、

それよりも強く私にそうさせたのは、何か目に見えない大きな力の働きだった。そのときもそう思っていたし、今でもそう信じているわ。心から。

それから私は足繁く冴佳のいる施設に通ったわ。いくらなんでも、初めて会った当日に「冴佳ちゃんを引き取ります」だなんて言えないものね。少しずつ、本当に少しずつでもいいから冴佳が私に心を開いてくれることを願った。詩のことだけではなくて、他の日常的で取るに足らないようなことについてでも色々と話をした。他の人たちには内緒よ、と言って自分が小説家であることも打ち明けた。そんなことをするのは初めてだった。それまでは私は信頼した人にだけ告白をすることを徹底していたのに、そのときばかりは人を信頼させるために鉄壁の防御を解いたの。すごく奇妙な気分に見われたけど、結果として冴佳はとても興味を持ってくれたわ。彼女は、私が最初に会ったときに彼女にした質問をそのまま私に投げかけてきた。私は可能な限り真摯に答えた。そうしているうちに、だんだんと私と冴佳は心を通じ合わせることができるようになってきた。何回目の訪問のときだったかしら、数えることもとうにやめた頃、帰り際にあの子は寂しい、帰らないでと言ってくれたの。もう大丈夫、機は熟したと確信したわ。その日、私は帰宅するとすぐに渡會さんに冴佳を養

子にするという自分の意志と、その意志が揺るぎないものであること、万事上手く行くと確信していることをはっきりと伝えたわ。彼は受話器の向こうでしばらく沈黙してから「分かりました」と返事をした。

諸々の法的手続きと非法的手続きを全て完了させるのには多少の時間が掛かったけれど、そんなものは私の予想の範疇だった。木々が紅葉の気配を窺わせる頃になって、冴佳は晴れて私の養子となった。冴佳は自分の娘であるという事実を反芻することは、私のそれまでの人生における最高の喜びとなったわ。血の繋がりなんか全く問題にならなかった。そんなものはごく些細な注釈、誰も目を向ける必要のないさやかな但し書きでしかなかったの。冴佳は私のことを手放して「お母さん」と呼んでくれた。冴佳が「お母さん」と言うときのその声音、口の動き、表情を見るたびに私は幸福をそこにあるものとして何の躊躇もなく享受することができた。私は世界を——少なくとも私が関知する限りにおいて、というにとだけけれど——肯定することができた。星々は正しく輝き、地球は正しく自転し、カーテンの隙間から漏れる朝日は正しく私たちを眠りから醒まし、そして冴佳は正しく私と共にいた。今思い返すと、あまりに何もかもが出来すぎていたわ。だけど、当時の私は疑うということを綺麗さっぱり忘れ去って

たの。きっと私はある種の酩酊状態に置かれていたのだと思うわ。私の判断力は徹底的に鈍っていた。人は常に懐疑論者であるべきだとまでは私も考えないけれど、人は常に樂觀主義者であるべきでないのは確かなのよ。

私たちは当面の間、どんな瑕疵も見当たらない理想的な生活を送った。当然のごとく私は育児という経験を全くしたことがなかったけれど、あたふたしていたのは最初のうちだけで、すぐに母親として生きることが自分の身体に馴染み始めたわ。驚くべきことに、私は存外母親に向いているようだった。もちろん、冨佳が基本的には手を焼かせない子供だったこともかなり大きかったけれどね。冨佳は成績優秀で容姿端麗、そして品行方正というまさに非の打ちどころのない子供だった。彼女の心の深奥に何か尋常ならざるものが存在していることは確かで、周りの子供たちより若干浮いている感じは否めなかったけれど、そのせいで何かトラブルに巻き込まれたり、人間関係に苦労したりすることは全くなかったわ。冨佳は家での時間のほとんどを読書と詩作に費やしていた。彼女の創作意欲、内なる炎と表現しても良いかもしれないそれは尽きることを知らなかったわ。私の書斎から適当に本を何冊か持って来て、しばらくそれらを読み耽って、そして詩に表すべきものが自分の中で見つかる、すらすらとノート

に詩を書きつけていくの。自分が書くべきことが初めから分かっているかのように、冨佳の筆はいつも澁みなく動いた。たぶん冨佳にとって、詩を書くということは生きるということとほとんど同義だったのだと思うわ。冨佳は気が向くときどき自分の書いた詩を私に見せてくれた。機嫌の良いときは朗読してくれることもあったわね。相も変わらず、彼女の詩は文句なく素晴らしいものだった。ときには土の中に眠る棺のような暗黒を、ときには流れ星が夜空に描くような輝きを、鮮明に情感豊かに、それでいて極めて合理的に示していた。でも、冨佳の要望に従って、彼女の作品を世間に公表することは決してしなかったわ。彼女の言葉をそのまま引用すると、「まだ準備が整っていない」とのことだった。確かに、まだそうするべき時期ではなかったように私にも思えたわ。何も焦る必要なんかなかったし、きっとそれで間違っていないかっただけだよ。その代わりというわけではないけれど、冨佳は頻繁に私に詩の感想を求めた。べた褒めしたいのはやまやまだったけれど、そうすると冨佳は目をつり上げて怒るものだから、なんとか頑張って批評めいたものをこしらえて彼女に伝えたわ。私の言葉を聞くと、冨佳はちよっとの間口を閉ざして考える素振りを見せて、それから私に手短に礼を言ってまた黙々と詩の世界に戻っていった。その後ろ姿を見て、私

は「ああ、この子は詩の女神様みたいだわ」なんて大袈裟なことを考えたりしたものよ。

彼女が詩を作る姿に影響されたみたいに、というかたぶん現実に影響されたのだと思うけど、私の執筆の進み具合もきわめて順調だった。冴佳を養子に引き取ってから一年の間に、短編集を一冊と中編小説を一冊書き上げたわ。書評は概ね好意的だったし、「今まで眞水氏の文章には見られなかった新しい視点があるように思われる」とか「またステージを一段上に昇ることに成功した」というようなコメントが数多くあった。それもその通り、私の人生には冴佳という存在が加わったんだもの。文章にその影を見出すことは困難ではなかったはずよ。

そんなこんなで一年が二年に、二年が三年になった。大体は繰り返しの毎日だったけれど、その繰り返しが私たちの幸福の要だったの。でも、反復する物事というのは人の脳をじわじわと、そして決定的に蝕んでいくものなのよ。人を骨抜きにする遅効性の麻薬なの。いつの間にか黒雲がもうすぐそこにまで迫ってきていて、私は何の手立ても講じることができなかった。嵐は一瞬にしてやって来て、荒れ狂う風と死人みたいに冷たい水とを思う存分そこらじゅうに撒き散らすと、まるで何事もなかったかのように去っていったわ。後に残さ

れたのは私だけだった。伏木恵美という生身の人間ひとりだけがぼつんと立ち竦んでいた。

そう、私が異変に気付いた頃にはもう手遅れだったのよ。愚かしくも不吉な翳りをようやく私が認識したとき、冴佳を養子にしてから三年とちよつとが経っていた。何の前触れもなく——と当時の私は思ったわ——冴佳が口をきかなくなったの。最初、私はこれはストレスからくる精神病の一種なんじゃないかと考えたわ。十一歳にもなると早い子は思春期に突入するし、往々にしてそういう子供は些細なことでもよくよと悩みがちなものだから。私にも言えないタイプの問題を独りで抱え込んでいて、心がその負担に耐えきれなかったのだと私は決めつけてしまった。それが大きな過ちだった。今だからこその言えることだけど、冴佳が言葉を発さなくなる前からそうなる予兆のようなものはあったのよ。沈黙の病に罹るおよそ数週間くらい前だったかしら、私と会話しているときに不意に口を閉ざしてしまうことがたびたび起こったの。喋っている途中なのに、嘘みたいになつと言葉が途切れてしまうの。まるで自分の殻の中に閉じこもるみたいに、外界と彼女との間に不透明な仕切りを打ち立てるかのよう。そのときの冴佳の目はひどくぼんやりとしていて、いつもそこに宿っている光は、暗く深い瞳の海の奥底に沈んでしまっていた

わ。普段から喋ることはあまり多くなかったし、ハムレット型とドンキホーテ型なら間違いなく冴佳は前者だったから、私はちよつと気になっただけで特に心配するようなことはなかった。もっと正確に言えば、心配するという行為そのものが私の中から抜け落ちてしまっていた。あのとき何かしら手を打っていれば、もっと早く気が付くことができたら……。

冴佳は全く喋らなくなると同時に詩を書くのもやめてしまっていた。私は賢明な判断だと思ったわ。何か他のものに心が囚われている状態で無理に書こうとしても、優れた作品を仕上げられるわけがないから。でも、詩を書くのをやめた冴佳は、言わば魂の抜けた生ける屍といった有様だった。ソファの上にじっと座って無表情で考え事をしているらしい冴佳を見て、私は彼女が早く元の彼女に戻るよう祈ることしかしなかった。冷たい海底から一刻も早くこちら側に帰ってきてほしいと願った。

結局、冴佳の沈黙の意味を理解することは叶わなかったわ。逆説的ではあるけれど、一切語らないことによって、彼女はそれまでよりずっと雄弁に何かを語っていたはずなのに。間抜けな私はとうとうそのメッセージを解読することができなかった。そして冴佳は姿を消した。

伏木恵美はふう、と息をつき、喉がカラカラになっちゃったわと言いながら紅茶を飲んだ。そこで和史も喉の渇きに気付き、彼女に倣って紅茶を飲んだ。今や和史がいるこの空間は、彼にとつて、あるひとりの女性の家のリビング以上の意味を持つものになっていた。

「それで、その後はどうなったんですか？」

和史は自分で自分の声と言葉に嫌悪感を抱いた。どうして僕はこんな下らない声で下らないことしか言えないんだろう。

「どうもならなかったのよ」と伏木恵美は咀嚼するように言った。「どうにもならなかったの。冴佳はあれ以来二度と私の前に姿を現していない。犯罪に巻き込まれたとか、神隠しのような超自然的な現象に遭ったとか、そういうのではないわ。冴佳は冴佳自身の意志で、きわめて能動的に、私のもとを去っていったの」

外で犬の吠える声がした。犬はどこかの誰かに向かって延々と報われることのない警告を発していた。

「冴佳の生死については何も分からないし推察することもできないわ。そもそも彼女が生きているかどうかなんて、どうでもいいことなのかもしれない」

「どうしてそう思うんですか？」

伏木恵美はその問いに答えなかった。それは、答えないことを選択したようでも、そもそも答えることができないようでもあった。和史は彼女と目を合わせた。しかしその目は何も語っていないかった。語らないことによつて、何かを雄弁に語る。そんなことが本当に可能なのだろうか。

「でもね」と伏木恵美が出し抜けに言った。「さつき墓地であなたを見かけたとき、あなたが冴佳を——あるいは冴佳なるものを探していることが分かったの。理屈抜きで、まさしく直感的に」

「それなら、どうして白いワンピースだなんて具体的なことを言い当てられたんですか？」

「だって、」

伏木恵美はそこで言葉を止めた。和史はその続きを待った。そのまま一分が経った。秒針が六十回音を立てたのだ。しかし彼女が再び話し始めることはなかった。どうしたんですか、そう和史が問おうとした瞬間、彼は気付いてしまった。伏木恵美の目はひどくぼんやりとしていて、ついさつきまで頼りながらまでもそこに宿っていた光は、暗く深い瞳の海の奥底に沈んでしまっていたのだ。その瞳は瞳としての機能をすべて放棄しているかのようなのだ。和史が思わず彼女の肩に触れようとするやいなや、彼は彼女が何かをぼそぼそと喋っていることに気が

付いた。その口元に耳を近付けると、伏木恵美が「ごめんなさい」と繰り返して呟いていることがわかった。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。それは、遙か古代に失われた言語のような響き方をしていた。

和史が祖父母の家に戻ると、れんげがキャンキャンと甲高い声で鳴いた。それを聞きつけた真希子が険しい顔をして玄関にやってくる。真希子はこんな遅くまでどこに行つてたのだとか、散々心配したんだからだとか、そのようなことをまくし立てたが、そのいずれもが和史の耳には空虚に聞こえた。和史は具合が悪いな、と一方的に告げ、二階に上がって部屋に入り、着替えることもせずにそのまま布団の上に横になった。和史の予想とは反して、眠りはすぐに彼を絡めとっていったし、悪夢を見ることもなかった。

和史たちが鹿角から仙台市の自宅に戻ってから一週間ほど経ったある日、和史が退屈を紛らわすためにテレビをつけると、「国民的作家・眞水鏡子さん失踪」の文字が画面に映し出された。女性キャスターがさも気掛かりそうにコメントをしていた。

和史は驚かなかった。分かっていたことだ。あのとき、彼女が奈落的な沈黙に陥った瞬間、和史は彼女もまたそう遠くないうちに消滅するだろうと確信したのだ。いや、あるいは消滅などしていないのかもしれない、と和史は思い直した。現に彼は冴佳——もしくは冴佳なるものを見たのだ。そう、二人とも、ただ単に存在の仕方を変えただけなのかもしれない。ちやうどスイッチをばちんと切り替えるみたいに。人々が認識できない形で彼女たちは存在し続けているのかもしれない。でも、そうすることとで一体何が得られるのだろうか。そこには何か意志に基づいた目的のようなものがあるのだろうか。和史には分からなかった。冴佳が伏木恵美に訴えかけたメッセージ、語らないことによつて語ったもの、それを明らかにすることができたら、ひよつとすると何かしらの解答が見えてくるのかもしれない。でも、それを知り得る者たちは、少なくとも和史の前には二度と現れることはなさそうだった。

「お兄ちゃん！」と美菜が叫んだ。呼ばれている、と和史は思った。僕は呼ばれているのだ。美菜のもとに行かなければならない。